源流の四季

第4号（2002年1月）冬
Winter

発　行　所／多摩川源流研究所　山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428(87)7055　FAX 0428(87)7057
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流観察会
印　　刷／(株)サンニチ印刷
http://www.cosmo.ne.jp/~genryu/
E-mail:genryu@max.cosmo.ne.jp

春を告げるカタクリの花（撮影　中村文明）

Contents 目次

源流の冬……2・3
新春特別対談……4~7
水源の森「林相調査」を開始……8・9
成隣小が「源流体験教室」……10
設立から幅広い活動を展開……11
「源流学校指導者養成講座」が修了……12

源流の冬

師走と共に源流は氷点下の世界になる。
しんしんと凍てつく風に誘われて
深い眠りから覚めた氷や雪が渓谷を覆う。

キラキラ輝く氷（二ノ瀬川渓谷）

神秘的な氷柱（小菅川渓流）

凍結する出会い滝（竜峡谷）

深い雪に覆われたニノ滝川

川崎市長　阿部孝夫氏

所長　私は九州の宮崎県高岡町の出身です。家のすぐ近くを大淀川が流れており、この川で泳いだり、魚を釣ったり、潜って魚を突いたりと川で遊び川で育ちました。母親の実家が、九州山地から流れる清流の綾川沿いでしたので、ここでも一日中川で遊んでいました。幼いときから川が大好きでした。

ところで、私もみかん農家の6人兄弟の末っ子でしたが、市長さんは何人兄弟ですか。

市長　私は、7人兄弟の7番目なんです。家族が大勢だったので、家にいてもいなくても関係ないんですよ。夕食の時、気づいたら一人いないと母親が騒ぐんです。そんな感じで育ちましたね。

所長　家庭環境はよく似ていますね。兄たちは家業の手伝いが辛かったと言っていましたが、私はほったらかしでした。自由放任だとやりたいことがとことんやれるし、物事に対する意欲が育ちましたね。

市長　いわれているような過保護とは無縁の世界でしたね。何でも自分でやらないと誰も助けてくれないんです。タケノコと同じで子供はスクスク育つものなので、ちょっと距離を置いて見守る余裕が欲しいですね。

川崎市そのものが多摩川のおかげで誕生

所長　ところで、阿部市長さん。川崎市は多摩川とどんな係わりを持っているのでしょうか。

市長　川崎市そのものが多摩川のおかげで誕生したと言っていいでしょう。多摩川を挟んで東京と川崎に同じ地名があるんです。両岸にあるということは、氾濫で多摩川の流れが変わった結果なんです。多摩川は、別名「あばれ川」とも呼ばれていました。市名の川崎も川の先を意味していますし、多摩川の三角州上に広がっているのが川崎です。まさに川崎市というのは、多摩川のつくった町なんです。

所長　そうなんですか。国土交通省京浜工事事務所の方から教えていただいたんですが、川崎市は多摩川に接している距離が約30キロで流域自治体の中で最も長いとのことでしたが、歴史的にも関係が深いんでしょうね。

市長　古くは縄文時代から、多摩川のほとりでは豊かな自然や水を活用した生活が営まれていました。江戸時代には、小泉次太夫によって二ヶ領用水が開削され、多摩川の水を引いたこの用水の恵みによって田んぼや畑の開墾が進みました。川崎領、稲毛領の二ヶ領を潤すこの用水が市内を毛細血管のように流れ、村の成長・発展を支えました。

近年では、工業用水にも利用され川崎市の工業都市としての発展に多摩川は大きく貢献しています。他の水系を含め、川と川崎は切っても切れない関係にあるといっても過言ではないでしょう。

所長　いやー阿部市長さんの多摩川に対する思いの深さに感銘しました。川崎市民の皆さんの多摩川への係わりは如何ですか。

市長　多摩川は、市民の皆様の中に無意識のうちに入り込んでいるといってもよいでしょう。川崎イコール多摩川ですが、あまりに近すぎて時々忘れられたりしています。魚を発見したり、河川敷で植物を見つけたり、多摩川の素晴らしさを多くの市民が発見して喜んでいますが、ごく当たり前にとけ込んでいるが故に、見過ごされている面もありますね。

所長　なるほど。多摩川の良さや値打ちを身近すぎて意識できないケースもあるということで

源流研究所所長　中村文明氏

すか。

市長　ここで生まれ育った人が、どこか遠くの川のないところで生活すると、それこそ、故郷は遠くにありて想うものとの心境で、多摩川と共に川崎がある、川崎には海があるという思いを強く持つのではないでしょうか。

市民と多摩川との係わりについてですが、先ほどの二ヶ領用水の取入口に「二ヶ領せせらぎ館」が平成十一年に開館しました。現在、「多摩川と語る会」の田中喜美子さんに館長を務めていただいていますが、多摩川エコミュージアム推進委員会の皆様方とご一緒に実に活発に活動されています。

せせらぎ館の活動が市民の間に自然発生的に広がっている

所長　田中さんは良く知っています。私は、田中さんの情熱的な話に心が動いて、源流での活動を開始する契機になったんです。彼女との出会いがなければ多摩川源流観察会は生まれなかったかもしれません。私もせせらぎ館に何度も足を運んでいますが、賑やかですね。

市長　多摩川そのものを博物館と位置づけたエコミュージアム計画の拠点であるせせらぎ館で、多摩川を大切にする活動や、自然保護運動とかが展開されています。また、生き物や水質を調べる環境セミナーや「源流写真展」、自然観察会なども開催されています。

そしてもっと気軽に市民が多摩川の散策の途中で立ち寄れるなど多摩川に関する総合的な拠点として、開館三年目で五万三千人の来館者を迎えています。

所長　大変な盛況ですね。せせらぎ館が多摩川を知りたい、多摩川が好きだという方々の心の拠り所になっていますね。

市長　そうなんです。ごく自然な形でせせらぎ館にいろんな人が集まって、そこを拠点に活動しているんです。この様なことが市民の間に自然発生的に広がっていることは素晴らしいことですね。せせらぎ館の運営を支えていただいている市民の皆様に感謝しています。

子供たちの生き生きとした姿を見ると多摩川がまさに環境教育の最適地

所長　それから阿部市長さん、川崎の「水辺の楽校」が、存在感を増していますね。昨年の夏には小菅村の源流にも親子で大勢訪ねてくれました。

市長　嬉しいことは子供たちにとって、多摩川が自然を楽しく学ぶ学校になってきていることです。京浜工事事務所の協力を受けて川崎に「水辺の楽校」が生まれました。活動している子供たちの生き生きした姿を見ると、ここが正に環境教育の最適地だということを証明していると思います。

どこの地域からも水に触れられるのが川崎市の特性ですからね。

所長　少子化が進む中、子供たちが家庭や地域でもまれて成長する機会がすごく減ってきています。「水辺の楽校」は低学年から高学年まで一緒になって活動していることがいいですね。子供たちが保護者の方々や地域に見守られ支えられて成長している。これを京浜工事事務所や川崎市が大きな懐でバックアップしているのが「水辺の楽校」なのですね。

市長　とても良い方向を向いています。だんだん町全体が人工化していくなかで、ごく自然の中でいろんな経験を積む。成功したり、失敗したり、虫にかまれて血が出たとか、つまずいてケガをしたとか、こうした様々な経験を積みながら子供は成長していくわけです。

所長　保護者の方々の参加が目立ちますね。川を仲立ちに子と親、地域が結びついています。ここには人間本来のぬくもりを感じます。

市長　そうですね。今保護者の中にも昔そうした経験のある方もいればそうでない方もいます。地面とか自然とかを仲介として親子が触れ合っていく、また遊う場所の人たちとも共通のテーマで触れ合うことは、非常に素晴らしいことだと思います。

また、源流・上流と下流は少し違いますが、源流があるから下流があるということを体験を通してつかむことが大切なことではないかと思います。源流の水はこんなに綺麗なのかと参加した子供たちもビックリしているようです。

生まれたばかりの澄みきった本物の川を心に刻んで欲しい

所長　昨年川崎や世田谷、昭島の親子に源流研究所の「源流体験教室」に参加していただきました。目の前を流れる清流を両手ですくって飲む光景があちこちで見られ、「美味しい」という歓声が上がりました。

小学校の体験生は「谷を歩くなどいろいろな体験をして『自分で出来る』ってことが分かりました。川はきれいでビックリするほどでした。本当に緑がいっぱいだし、川崎では出来ない体験だし源流体験をして良かった。」と感想を寄せています。

市長　子供たちにとっては、衝撃的な体験、出来事だったんでしょう。親や大人の反応は如何でしたか。

所長　体験したお母さんは「新鮮な源流体験でした。空気の冷たさを顔や体で感じ、水の冷た

さを靴の中の足で感じました。立ち止まって川の音を聞きながら目で岩や木、水の色、石の形を見ては川の静かな顔と強い顔を見ることが出来ました。スタッフの話を聞いて「瀬」「淵」を見ると自然は無限の力で生きているんだと感じ、源流から勇気をもらいました。」と感想を述べていました。

市長　「自然は無限の力で生きている。源流から勇気をもらった。」これは、命を生み育てた母親の研ぎ澄まされた感性から生まれた名言ですね。

多摩川の魅力を語り合う阿部市長（右）と中村所長（川崎市役所）

ところで、中村所長は「源流体験」にどんな思いを込められているんですか。

所長　親子に本物の川に触れて欲しいと願っています。生まれたばかりの澄みきった輝いた本当の川を心に刻んで欲しい。自らも澄みきった川に染まり、心の中を本来の川が流れて欲しいのです。

自然こそが最高の芸術です
自然に勝る物はないでしょう

本物を知らなければ偽物が分かりません。生まれたときから、傷ついた汚れた川を見て育つと、その姿を当たり前のように錯覚してしまう。川は傷つけられた悔しさを胸に秘めながら流れている。その嘆きが聞こえる人間になって欲しい。その川が伝えたいことが分かる子供に成長して欲しいと願っています。

市長　いいですね。私自身、そういう所で育ったものですから、今中村所長のおっしゃる話を聞いていると情景が頭の中に浮かぶんです。川の中の石ころとか、綺麗な水がチョロチョロ流れている佇まいとか。こうした「源流体験」の機会を是非、出来るだけ多くの子供たちに与えたいですね。いい川に触れるといい子が育つんです。

所長　本当にそう思います。誕生したばかりの本物の川を知れば、身近の傷ついた川を見て、「川が可愛そう」と川への思いやりが生まれ、深まっていく。そんな優しい子供に育って欲しい。

市長　自然こそが最高の芸術ですね。どんな科学技術も、自然に勝るものはないでしょう。そういう意味で本物の自然である多摩川や源流の存在は大きい。人間の力で創り出すことが出来ないもの、人間の能力を遥かに超えた無限の力を自然は持ち合わせています。これからも是非多摩川を大切にしていきたいですね。

所長　全く同感です。

今後、源流域全体の調査研究を一層進め、源流域全体に希望の光をともしたいし、源流と流域との交流を促進したいと決意しています。阿部市長さんも是非源流へお出かけ下さい。

市長　私も是非行きたいですね。そして大勢の市民の方に、源流を訪ねて行っていただけるよう、川崎市としても応援したいと思っています。

昨年の多摩区民祭に源流研究所と小菅村でヤマメや生ワサビなどの特産物を販売していただきましたが、今後も源流からも川崎市の祭りに積極的に参加していただければありがたい。ヤマメの塩焼きを食べましたが美味しかったですよ。

所長　ご協力有り難うございました。いゃー市長さんが気さくに出店周りをなさっていていいなあと思いました。

最後になりましたが、私たちで作りました「多摩川源流絵図」をお持ちしました。源流域にある滝や淵、尾根や沢等の地名とその由来を調査し、記録、保存、継承したいと考えています。

市長　大変な作業でしたね。聞くところによると、所長は、何百回も源流に通われてこの源流絵図を作成されたそうですね。所長の源流への思いが込められた大変な宝物ですね。ゆっくり、見させていただきます。

所長　本日は貴重な時間を割いていただきまして本当に有り難うございました。川崎市の今後の発展を心から祈念します。

源流・水源の森『林相調査』を開始

源流研究所は、東京農業大学と共同で9月28日から30日、10月9日から11日と二次にわたって源流・牛ノ寝「林相調査」を実施しました。調査に当たって、8月29日、東京農業大学の宮林茂幸教授と、菅原泉講師と源流研究所の中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員が、調査の目的と進め方について検討しました。その結果、水源の森の樹種、巨木調査、標準地調査、土壌調査等に取り組むことを確認しました。調査に当たっては、都水源林管理事務所に調査計画書を提出し、自然環境に細心の注意を払いながら調査に当たる旨を伝え了解を得て進めました。

源流研と東京農大が共同で

9月28日から30日の第一次調査は、東京農大から菅原先生と造林学研究室の学生5名、源流研究所から中村所長、佐藤事務局長、井村主任研究員の9名が参加しました。10月9日から11日までの第二次調査にも同様の人数が参加しました。

水源林林道の終点まで車で入り、そこで調査機材や食料をザックに詰め、標高1500㍍の牛ノ寝・玉蜀沢出合いまで1時間30分かけてきつい坂道を上り詰めていきます。

調査地につくと、菅原先生の指示で50㍍×20㍍のプロットを設定し、その区域を等分に細分化して、樹種や胸高直径などの調査が開始されました。あたり一面に背丈を超えるスズタケが繁茂し、調査活動が難航。機材や足がスズタケにまとわりつき移動が大変困難な場所があちこちにありました。

調査地には、ブナ、ミズナラ、ツガなどの大木や、トオゴクミツバツツジ、アセビ、リョウブ、サラサドウダンなどの低木が約30種類確認されるなど、樹種が豊富であることが判明しました。

樹高を調べる

胸高直径をはかる

学術的に注目されるシオジ林

ところで、調査地に向かうアカドチ沢沿いのシオジ林に意外な発見がありました。ここには、大小無数のシオジが林立しており、その林相が学術的に見て大変貴重であるとの指摘が宮林・菅原両先生からなされました。ここのシオジが天然更新していること、天然更新しているシオジ林は稀であること、ここのシオジは長期に渡り観察する価値があるとのことでした。

一方、牛ノ寝のブナ林に関して、スズタケの繁茂により天然更新が阻害されている地点がみられ、新しい課題も浮かび上がりました。天然更新できない森林は、あと何百年後には姿を消すことになるわけで、牛ノ寝に見られるこの見事なブナが消滅したら困ると思わず叫びました。

もちろん、調査は始まったばかりで、安易な結論は避けなければなりませんが、林相の実態、その特性や課題、問題点などを徹底的に究明していきたいと調査団は張り切っています。

林相調査隊のメンバー（9月28日）

源流・牛ノ寝「林相調査」に参加して

源流水源の森「林相調査」は、源流の森の実態解明に向けて第一歩を踏み出しました。調査活動に参加した方の感想を紹介します。

東京農業大学森林総合科学科造林学研究室講師
菅原　泉

大菩薩妙見の頭を頂とする小菅村に所在する都水源林。その標高1000㍍付近に位置するブナクラス域には、ミヤマクマワラビーシオジ群集が、小菅川源流の雄滝周辺の爆岩地に生育発達し、河川上流域の山地保全や水源地の保安林として重要な位置を占めている。

今回の調査地は、水源林林道終点からアカドチ沢を登ったところの牛ノ寝に設定した。調査地に至る歩道沿いには、シオジの天然更新が見られ、学術的にも重要となる林分が見られた。

標高が上がるにつれ、イヌブナ、ミズメ（ヨグソミネバリ）を上層木とし、下層木にはコアジサイ、アオハダ、チドリノキなどが見られるようになった。また、途中の尾根部には、アセビとネジキの大木が群生した珍しい生育地も見ることが出来た。

調査地には、50㍍×20㍍のプロットを2ヶ所設定した。調査地の一つである玉蝶沢上流の牛ノ寝尾根にはスズタケが一面に生え、下層木にはトオゴクミツバツツジ、アセビ、リョウブ、サラサドウダン、オオカメノキなどを主とした約20種が見られた。上層木には、ブナ、ツガ、ミズナラなどを主とした約10種が見られ、その内、ジゾウカンバのような希少種も含まれていた。

今回調査した区域を含め、水源林の樹種は山地で普通見られるよりも大木となっているので、樹皮などが一般のものと異なっていることも一つの特色であった。

ホームページを開設

多摩川源流研究所は、12月1日、多摩川源流研究所のホームページを開設しました。ホームページは、源流フォトギャラリー、多摩川源流研究所紹介、設立プロジェクト委員会答申、文明の源流日記、掲示板からなっています。ご覧になってどしどし意見や要望をお寄せ下さい。

源流フォトギャラリーは、塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村を含む源流一帯の渓谷や山々が、四季を通して紹介されています。特に、塩山市にある笠取山の水干から流れ落ちる多摩川の最初の一滴は、真珠のような輝きが見事に捉えられており、思わず行ってみたくなる衝動に駆られる作品です。

多摩川源流研究所紹介では、源流研究所がこの間取り組んできた調査活動や源流体験、交流活動が詳しく紹介されています。ホームページとEメールのアドレスは表紙題字下に紹介されています。

ファックス番号が変更

源流研究所のファックス番号が変わりました
電　話　0428―87―7055
ファクス　0428―87―7057

調査に参加して

多摩川源流研究所主任研究員
井村礼恵

今回の調査は、源流研究所が設立された目的の一つである「水源林の実態を明らかにする」ことを達成するための、第一回目の調査であった。

研究所の事業として、体験教室などを行う際や、源流域の魅力を語る際にも、水源林の実態を把握することは最重要である。

私は実際に調査に加わり、菅原先生や学生さん達と一緒に、数に入った。北向き斜面と南向き斜面では大きく、林相が異なることが明らかだった。特に、ササの種類の違いや成長の差は、顕著に表れていた。ササの樹高は高い所で、私の背丈以上もあり、クマが生息していることを連想した。（最近、熊棚といわれるクマの生息跡がたくさん見られる。調査した付近にもイノシシ等と共に多く生息しているようだ。）豊かな自然環境のもとでは、野生動物達も生息している。

他には大きな発見だったことの一つに、「ジゾウカンバ」という地域限定種の生育が明らかになったことが挙げられるだろう。何度も歩き、何度も目にしていた樹木がこの周辺にしかないものだったのだ。これから一緒に源流域を歩くプログラム参加者にぜひ教えたいなと思っている。

また、林相調査と平行して行われた土壌調査では、表土が30㎝程も深く積もっていて、広葉樹が土壌を作り出す力に改めて感心した。この落葉の堆積によって、土壌の保水力は増す。水源林にとって、いかに広葉樹が大きな役割を果たしているかを実感した。今回は天然林地帯の調査を行ったが、今後、水源林内の人工林地帯の土壌調査も行い、ぜひ比較をしてみたい。その結果からも水源林内のほとんどを占める天然林の価値が確かになるだろう。

実態調査は始まったばかりだ。多摩川流域全体の宝である源流域に関する調査を今後も地道に継続していきたい。

自然は無限の力で生きているんだ！

昭島市の成隣小学校4年親子が「源流体験」

昭島市の成隣小学校の四年生は、十月四日、小菅村を訪れ、校外学習の一環として「源流体験教室」を行いました。当日参加したのは、四年生九十名と保護者と教師のあわせて百十三名で、渓谷沿いの源流体験コースを学校の行事として実施するのは、成隣小学校が初めてでした。

午前十一時に大型バス二台で源流研究所に到着した一行は、村営釣り場駐車場で、「源流体験」のマナーと心得を聞き、一人一人が手渡されたヘルメットを頭にしっかり装着し、一組、二組、三組に分かれて小菅川の上流へ向かいました。

源流を渡る体験生

十月初旬ともなると水温は十度まで下がっていましたが、体験者は、「冷たい」と悲鳴を上げながらも元気に源流を歩き、源流研究所のスタッフの話を聞いていました。

一組を担当した中村所長は、「川を横切るとき、流れをよく観察すること。流れの穏やかなところ、川底の平らなところを確認しながら、歩幅を小さく取りながら進むこと」とアドバイス。また、赤沢出合い下淵では、「急な流れを瀬と呼ぶ。深く掘られた淀みを淵と呼ぶ。正面の岩盤に激しくえぐられた跡があるが、これら一つ一つが大きな洪水によって造られてきたものだ。源流の岩や石、流れや水の色までよく観察して欲しい」と語りかけていました。

源流から勇気をもらった

体験した母親は、「立ち止まって川の音を聞きながら、目で岩や木、水の色、石の形を見ては川の静かな顔と強い顔を見ることが出来ました。スタッフの話を聞いて『瀬』『淵』を見ると自然は無限の力で生きているんだと感じ、源流から勇気をもらいました。」と、感想を寄せてくれました。

この日は、九月の台風の影響で水量が多かったため、釜淵、のぞき淵、瞳淵などのコースは体験することが出来ませんでした。体験者は、昼食を食べたあと白糸の滝を見学し、スタッフからアオダモなどの樹木の解説を楽しんでいました。

体験者の感想

■源流体験で一番心に残ったことは流れの強いところを石につかまりながら歩いたときです。その時は体が流されそうでしたが、石につかまりがんばったので歩けたと思います。頑張っただけでなく、井村さんや小木先生などサポート隊のかたがたが応援してくれたからだと思います。

■川へ入ってみると予想していた冷たさではなく、とても冷たかったです。まるで氷の上を裸足で歩いているような感じでした。一歩歩くごとに、自分の足が凍っていく感じでした。少し川を歩き回っていると、木が竜の形に似ていたので中村さんに「あの、竜の形に似ている木は人間がわざと造ったの」と聞くと、「川の流れ、台風の雨などであの様になったんだよ」と教えてくれた。私は聞いたとき、川、自然ってすごいなあとビックリしました。

■川の水が「ゴーー」「ザーー」と音がして、少しドキドキしてきました。ヘルメットをかぶっていたので少し安心しました。でもここからが本当の源流体験です。「バッシャーン」だんだん靴下に水が染み込んできて足に水がきました。私は、「つめたあーい」といいました。みんな真剣そうに川を辿っていきます。水が早く流れているところに行ったとたん私は流されそうでした。

■いよいよ源流体験が始まりました。とっても冷たくてビックリしました。スタッフの佐藤さんの指示に従って歩いていきました。最後に3分間だけ自然を感じました。空は緑色で、水はキラキラすきとおって青々としていてとても綺麗でした。

真剣な顔で源流を歩く（10月4日）

研究所幅広い活動を展開

昨年の4月8日、山梨県小菅村に設立した多摩川源流研究所は、9ヶ月を経て新しい年を迎えました。多摩川源流研究所は、①源流域の調査・研究 ②源流域の自然や文化の情報発信 ③源流体験教室の創設 ④流域・全国との交流を活動の柱に据え、設立から僅かな期間ではありますが、多くの皆様の支えをいただきながら幅広い活動を展開することが出来ました。その主な活動を振り返ってみます。

設立式典

●4月8日の設立式典は、地元をはじめ多摩川流域の行政機関や一般市民の方々など各界から200名の参加をいただき、盛大に開催されました。また、当日は高橋裕先生の「新しい世紀と源流の役割」と題した記念講演や第1回全国源流シンポジウムが開催されました。

調査研究

●源流域には手つかずの豊かな自然が存在しています。その実態を調査研究する事業として、「半の寝の林相調査」(樹種・土壌・巨木など)を標準地調査法により行いました。

多摩川の豊かな水を育む水源の森として、その価値は計り知れないものがあります。

この調査には、研究所の運営委員長でもある東京農業大学の宮林先生と菅原先生のメンバーが当たっております。今後も調査範囲を広げて調査活動を展開します。

情報発信

●多摩川の源流域に関する情報を流域に広く発信し、源流に関心を持っていただく手段として、年4回「源流の四季」を発行しています。

源流の関係市区町村の協力を得て各小中学校や図書館などに配布し、源流と流域を結ぶ事業として好評を得ています。

また、研究所のホームページも立ち上げ広く情報を発信しています。

●流域の市区町村などの協力を得て5ヶ所で多摩川源流写真展を実施しました。多摩川の源流域の魅力を多くの人々に紹介しました。

そば打ちに挑戦する川崎市民（11月11日）

源流体験教室

●小菅川の源流部に、源流に直接触れることのできる源流体験ゾーンを設けました。学校や子供会、親子で源流の自然に触れることの出来る機会として、川崎市の水辺の楽校や昭島市のエコキッズの親子、昭島市の成蹊小学校4年生などが訪れました。また、水温の低い春や秋には、雄滝や白糸の滝を訪ねました。

都会の子供や親にとっては、源流部の清流や水の冷たさ、切り立った岩や淵、巨木など本物の自然に触れ、素晴らしい体験になりました。

●源流域の水源の森を歩く「大菩薩探訪の旅」や1週間歩き通した「源流古道・水源林の旅」を実施しました。回を重ねると、リピーターも増え、すっかり水源の森のファンになったようです。また、川崎をはじめ流域の各地から源流を訪ねる数多くのツアーが計画され、交流を深めました。

流域・全国との交流

●東京で開催された「川の日」のイベントに参加しました。川で活動している団体が全国から集い、活動内容を発表し合いました。全国各地の素晴らしい川や川づくりを知ることが出来ました。その他にも流域のイベントに積極的に参加しました。

2年目の今年は、更に充実した活動を展開します。皆様のご指導ご協力をお願い申し上げます。

再会喜び合う大菩薩探訪の旅

源流研究所と小菅村は、十月二十、二十一日と十一月十七・十八日にそれぞれ第一回・第二回・第三回「源流・大菩薩探訪の旅」を実施しました。第一回には十六名、第二回には、二十九名が流域各地から参加しました。

今回の参加者は、源流研究所の活動の広がりを反映してリピーターが半数を占め、顔見知りも増えて、お互いに再会を喜び合うなど和やかな楽しい探訪の旅となりました。

第一回目は、小菅村の長作地区の長作観音堂や御嶽神社の樅や欅の大木を観察したり、郷土料理を楽しみました。

第二回の探訪の旅では、牛ノ寝の紅葉が丁度見頃で、赤や黄色の素晴らしい彩りに、参加者は歓声を上げていました。

第二回目は、はじめて小菅側から大菩薩峠に登山するコースが採用され、晩秋の自然林の中を枯れ葉を踏みしめながら上っていきました。紅葉は終わっていましたが、その分稜線からの眺望は格別でした。また、ミズナラの木にいくつも熊棚の跡が確認され、参加者は珍しい光景に見入っていました。

澄み切った青空を背にパチリ（11月18日）

多摩川源流学校

指導者養成講座が修了

前号（第3号）に引き続き、第6回講座以降の内容を報告します。6月20日、無事に全講座が修了しました。

自然や人間との関係を深める

第6回目は、奥多摩町の川苔谷で1泊2日の実習を行いました。ここでは野外において、ローブワークを始めとする技術面と精神面を学習しました。

これまでの講座で命を守る条件の中で、体温を守ることはとても重要だということを教えていただいていました。そのため、実際にブルーシート一枚と一本の紐を渡され、各自の夜の寝床を作ることを試みました。寝床をうまく作るにはその場所の特徴を考慮しないと、雨にぬれたり、風の通りが良すぎて寒かったりと、環境に受け入れてもらえないことを実感しました。

救急法を学ぶ

夕方、みんなで焚き火を囲み、話をしながら過ごしました。岡田先生は火を囲んで話をした仲間との関係は継続することが多いとおっしゃいました。火には人が心を解き放つなにかがあり、小さな火を数人で囲むことで、人間関係が深くなるそうです。

その後、一人一人自分の作ったブルーシートの寝床へと向かいました。夜に一人で山で寝る経験をしたことがない受講者がほとんどでした。真っ暗な闇の中、虫や鳥たちの声に静かに耳を傾け、各自が自分自身と自然を見つめる時間を過ごしました。

この野外実習では自然体験プログラムの中で、特に重要な二つの工夫について学習したように思います。一つは自然と対話をするために、仲間との集団から離れ、個々の時間を持てるような工夫、もう一つは人間関係や信頼関係を深められるような工夫が必要なことでした。

体験者に何を伝えたいかが大切

第7回目は自分たちでプログラム作りをしました。最も重要なことは、「何を伝えたいか」「目的はなにか」ということを指導者側で明確に持つことだということでした。始めに受講者からは、思い思いの伝えたいことがだされ、プログラムづくりを行いました。どこのグループも目的は「自然環境への再認識」で、それを様々な体験の中で伝えようとしていました。例えば、Aは星や野鳥や水生生物の観察、Bは川遊び・ナイトハイク・民家泊、Cは2泊の野宿（白炊）などです。実際に目的と方法、活動内容、運営について案を作成してみたことはとても楽しく、具体的なイメージをもつよい機会となりました。

第8回目は、3回目の野外実習を小菅村内の白糸の滝と雄滝で行い、受講者が指導者として、フィールドを案内してみました。この二つの滝は小菅住民である受講者にとっては、何度も来たことのある見慣れた場所です。けれども、「そこで何を伝えたいか」というキーワードのもと、それぞれ自分の個性を発揮し、工夫を凝らしていました。感想では、「これまで自分には指導者なんて大役だと思っていたが、プレゼンテーションは安全面の確保の上に、各自が特異な分野を活かして行えばいいのだと思った。」という意欲的なものが多くでました。

最後の第9回では、まとめとして川辺における安全に関しての講義を受講後、修了証の授与を行い、一人一人感想を発表してもらいました。全員共通していたことは、受講前に比べ、地域環境に対する見方が変わったということでした。また、各自が特に印象深かったことはそれぞれ異なっており、岡田先生が講座の中にたくさんのメッセージを散りばめていてくださったことを改めて思い起こしました。

修了証明書を受けとる受講生

ただいま源流体験教室は冬期のため、休校中です。また、暖かくなってきたら、この受講者の方々と一緒に体験教室を実施しながら、システムづくりを行い、地道に質を高めていきたいと考えています。

R100 このパンフレットは、環境にやさしい古紙配合率100%再生紙・植物性大豆油インキを使用しています。